

衣服と情報

環境情報学部 准教授

みずの だいじろう
水野大二郎

どんな衣服であれ、それは何らかの「情報」を発してきた。

よく知られたところではロラン・バルトの『モードの体系』があるが、日本でも谷田岡次らによって服飾美学として、さらには鷺田清一や北山晴一らによってファッションデザイン学として、衣服が発する情報は20世紀後半に広く研究の対象となった。そして今、衣服はこれまでに多くの情報を発するメディアとして、その意義を再考する時期にきている。衣服は趣味や文化資本、社会階層、権力や富、流行、美、性差といった文化・社会的情報のみならず、心拍数や血圧などの生体情報も発するウェアラブル・デバイスとなったのだ。

今日、ウェアラブル・デバイスの多くがスポーツ用品や介護用品として開発されている事実は、日本における洋装化の歴史とともに考察すると極めて興味深い。脱亜入欧を目指すべく導入された日本人の洋装化は軍服や教育機関の制服から始まった。その後日用品としての洋服が日本社会において受容されるが、その過程には洋裁教育やミシンの普及など、洋装化を下支えした教育や技術があった。つまり組織的に統制された意匠から消費社会における自由な意匠への移行期に縫製教育と新技術が普及したことが、結果として日本独自の洋裁文化を発展させたのだ。衣服はこうして繊維産業の一部として日本社会の近代化・工業化に貢献したが、情報化に伴い日本の繊維産業はどのような進展を遂げることになるのか。2016年に筆者は、Google社とともに未来の「着るもの」を統合的設計対象とした研究を行った。その結果明らかとなったことの一つは、全く新たな知が求められるということだった。それは既存のIT産業と繊維産業をとりもつ横断的な知のみならず、新たな未来の「着るもの」を創造する新たな知であろう。センサやアクチュエータが衣服と分かち難く統合された未来の「着るもの」とはどのような情報を発するのか？引き続きこの難問に挑みたい。



Google 社との共同研究の成果物

談話室

教員によるエッセイコーナー